

毎日新聞社主催 公開座談会

<多様化する社会で、主体的に貢献できる人>を育てる私学の教育（第4回）が 開催されました

12月4日(日)T K P市ヶ谷カンファレンスセンターにて、毎日新聞社主催・日能研協賛「公開座談会」が開催されました。今回のご登壇は武蔵中学校 校長 梶取弘昌先生、灘中学校 校長 和田孫博先生です。

2010年から実施しているこのイベントは通算36回を数えます。2016年は「<多様化する社会で、主体的に貢献できる人>を育てる私学の教育」をテーマにし、今回が本年度最終回となりました。

会は2部構成で、第1部では、それぞれの先生方から各学校の教育理念や、日頃から大切にしておられる教育が伝えられました。梶取先生が卒業生の言葉を引用し、「役に立ったことはすべて、すぐには役に立たないことの上になりたっている」と、『保護者が大きな目で教育を捉えることの重要性』を説かれると、和田先生は「本当に困った時は親に相談に来る。親は100番目の相談相手」と、『保護者の子離れ』を勧められました。直線距離にして約420kmも離れた両校ですが、それぞれの教育観には共通点が多く、そこには『教育の目的は人を育てることであり、自ら学ぶ力を育てること、「自己」を確立することが大切なのだ』というメッセージが込められていました。

さて、第2部のパネルディスカッションは、「どんな生徒がいるのか?」という問いから始まりました。先生方が異口同音に仰っていたのが「生徒はとても個性的」「子どもは変わっていて当たり前」だということ。自分の個性を伸ばし、お互いの個性を認め合う。生徒だけでなく、先生も変わっている。それぞれのこだわりやユニークさが同居している……。そんな多様性の中で「自己」を確立していく子ども達の姿が語られました。

そして議論は、今まさに進んでいる「教育改革」を背景として、それぞれの学校で大切にしている学びについて展開されることに。まずは梶取先生から「武蔵には校則がない。規則があると子どもは考えなくていいから楽。授業も部活も学校行事も、すべて含めた学校の総合力で、結果として子どもの力が育っていく」と、武蔵らしさたっぷりのお話。それを受けての和田先生は「灘は授業のスピードが速いと思われているけれど、大切なのは深度。深く学ぶことでいろいろな角度からモノを見ることができる」と、国語の授業で1冊の本を1年かけて学んだエピソードを交えながら、これまた灘らしさ全開のトーク。両校ともに、旧制高等学校の良さを引き継ぎつつ、それぞれに独自の進化を遂げたその一端が見える……。そんな楽しい時間となりました。

続いては、本イベント恒例の『来場の保護者や子どもからの質問』です。「どんな準備をしたら合格するの?」「楽しく学ぶためには、周りの大人たちはどうしたらいいのか?」等の問いを素材にして、「合格だけを目指すのではなく、もっと先を見よう」「親や教員は余計な手出しをしないように」「学びは至るところにある。大人も学びを楽しもう」といった、大変熱のこもった展開になりました。

会全体を通して、それぞれの先生方から発せられるお話には、「大人としての居方、在り方」を問うものが多くありました。我が子を私学に通わせることは、その私学と価値でつながること、価値を共有することに他なりません。今回、来場された保護者の皆様は、我が子だけでなく、我が家もその私学の一員になるという「私学ならではの魅力」を改めて確認できたのではないのでしょうか。

当日の座談会記事は、12月中旬に毎日新聞本紙、1月上旬に毎日小学生新聞にも掲載される予定です。



<本件に関する問い合わせ先>

日能研本部 TEL : 045-473-2311 / FAX : 045-475-0544 / e-mail : pr@nichinokenco.jp